

# 平成31年度 プロジェクト全体 研究進捗状況

楠 淳澄（センター長，龍谷大学文学部教授）

## (1) プロジェクト全体の研究内容

（調書様式Ⅲ-1「①研究分野」「③期待される成果又はその公表計画」とⅢ-2の冒頭のプロジェクトの部分）

### 調書様式Ⅲ-1「①研究分野」

本プロジェクトは、日本仏教をアジアを中心とした世界的視野の中で包括的に解明することを目的としており、また仏教自体の本来のあり様がそうした総合的なアプローチを不可避なものとしているため、参加研究者も多彩であり、その分野も多岐に亘る。日本仏教そのものを主として史資料によって研究する真宗学・仏教学・仏教史学を初めとして、アジア諸地域に関わる歴史学、仏教美術・建築などの造形的側面からアプローチする仏教図像学、現地調査に基づき宗教の現状を明らかにする社会学・文化人類学、更には寺院をとりまく自然環境を史資料との関係において解明する植物生態学にまで及んでいる。人文科学・社会科学・自然科学の異なる分野に属する研究者が交流を深め、文理融合的な新たな視点を獲得し得る場を提供することにより、実りある独自の研究の遂行を可能とするところに、本プロジェクトの特色が存在する。

### 調書様式Ⅲ-1「③期待される成果又はその公表計画」

仏教が我が国の歴史と文化において担ってきた重要な役割を検証し、その社会性・公益性を明らかにすることは、現代日本社会の切実な諸課題への対応を考える際に、一定の有効な示唆を与える。また海外の日本仏教研究者・研究機関との連携において行われる本プロジェクトは、日本仏教研究の国際化の推進と、日本仏教さらには日本そのものの国際発信にも大きく寄与するものと信じる。

研究の成果は、国際・国内シンポジウム（各年度それぞれ1回開催）、ワークショップやセミナー（各年度に複数回開催）、ワーキングペーパー（ウェブサイト各年度10本程度掲載）、研究報告書（年1回刊行）、ニューズレターBuddhist World（仮称・年2回刊行）、ウェブサイト（随時更新）などの形で公表する。更に、龍谷ミュージアムと連携し、常設展・特別展にかかわる企画立案に参画する。なお、プロジェクトの達成度などを検証するために、本学に設置されている「研究評価委員会」において学内外有識者により中間及び事後の外部評価を受けることが定められている。

### 調書様式Ⅲ-2（平成27年度欄の初め）部分

本研究プロジェクトの主体となる研究組織「アジア仏教文化研究センター」(BARC)が、2015年度発足の新たな全学的仏教研究拠点たる龍谷大学「世界仏教文化研究センター」の傘下に置かれることに伴い、新たな組織と研究体制に即した研究スペースを確保し合理的に配置するため、大宮舎白亜館の3階・4階を改修し、効果的に共同研究を進めるための研究室を整備する。

また、次世代の研究者を育成するために、各グループに博士研究員を1名ずつ計2名、研究遂行を支援するスタッフとして各グループにリサーチ・アシスタント1名ずつ計2名を採用する。

## (2) 平成31年度のプロジェクト全体の具体的な研究内容

（調書様式Ⅲ-2「年度別の具体的な研究内容（【平成31年度】部分）」）

### 【プロジェクト全体の計画】

- 1) 研究総会と個別研究会を開催する。
- 2) 各ユニットの研究成果をとりまとめ、龍谷大学アジア仏教文化研究叢書として刊行する。
- 3) これまでの研究活動を総括する研究叢書『国際社会と日本仏教』を刊行する。
- 4) これまでの研究活動を総括する国際シンポジウム「国際社会と日本仏教」を開催する。
- 5) 国際シンポジウム「東アジア仏教思想史の構築—凝然・明恵と華嚴思想—」を開催する。
- 6) ウェブサイト運営とワーキングペーパーを掲載し、ニューズレターBuddhist World 及び研究報告書を刊行する。
- 7) 龍谷ミュージアム企画展「龍谷の至宝—時空を超えたメッセージ—」の企画運営に協力する。

### (3) 平成31年度の進捗状況・研究成果・根拠データ等（ユニット固有の活動は除く）

#### <上記(2)「具体的な研究内容」の進捗状況及び達成度>

- 1) 研究総会と個別研究会を開催した（※各ユニットの進捗状況を参照）。
- 2) 各ユニットの研究成果をとりまとめ、龍谷大学アジア仏教文化研究叢書として刊行した（※各ユニットの進捗状況を参照）。
- 3) これまでの研究活動を総括する『国際社会と日本仏教』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書 17）を刊行した。
- 4) 国際シンポジウム「東アジア仏教思想史の構築—凝然・明恵と華嚴思想—」を開催した（※グループ2ユニットAの進捗状況を参照）。
- 5) ウェブサイトを運営し、ワーキングペーパー等を掲載し、ニューズレターBuddhist World 及び研究報告書を刊行した。
- 6) 龍谷ミュージアム企画展「龍谷の至宝—時空を超えたメッセージ—」の企画運営に協力した（※グループ1ユニットBの進捗状況を参照）。

#### <上記(2)以外でプロジェクト全体として新規に実施した研究内容の進捗状況及び達成度>

- 特になし。研究計画どおりの事業が実施された。

#### <問題点（実施できなかった研究を含む）>

- 2020年3月15日に、龍谷大学アジア仏教文化研究センター（BARC）のこれまでの活動を総括する国際シンポジウム「国際社会と日本仏教」を開催する予定であったが、新型コロナウイルスの世界的流行の影響で開催できなかった。本シンポジウムの開催は、BARCの母体であり、その研究活動を引き継ぐ龍谷大学世界仏教文化研究センターの将来的な目標としたい。

#### 平成31年度プロジェクト全体に関する研究活動の根拠データ

##### <研究総会・全体研究会・シンポジウム・その他の活動一覧>

本年度は該当なし。

##### <研究総会・全体研究会・シンポジウムなどで協力を得た学外機関・研究者一覧>

本年度は該当なし。

## 平成31年度 グループ1ユニットA 研究進捗状況

杉岡孝紀（ユニットリーダー、龍谷大学農学部教授）

### (1) プロジェクトにおけるユニットの研究内容

（調書様式Ⅲ-1「②研究内容」とⅢ-2「全年度に亘る」の当該ユニットの部分）

#### 調書様式Ⅲ-1「②研究内容」

グループ1ユニットAは、古代から近世に至る日本仏教の特殊性・普遍性について思想・儀礼・世界認識などの観点から包括的に分析することで、東アジア仏教圏のなかに日本仏教を位置づけることを目的とする。特に本センターおよびプロジェクトの基幹的理念である建学の精神「浄土真宗の精神」を基軸としつつ、日本仏教の思想基盤というべき南都・北嶺に展開した仏教を多面的・総合的にとらえる「南都学」・「北嶺学」の構築を目指すとともに、前近代日本における仏教的世界観を解明する。

#### 調書様式Ⅲ-2「全年度に亘る」（平成27年度欄の初め）部分

##### グループ1ユニットA「日本仏教の形成と展開」

本ユニットは、古代から近世に至る日本仏教の特殊性・普遍性について思想・儀礼・図像・歴史・地理・環境などの多様な観点から包括的に分析することで、東アジア仏教圏のなかに日本仏教を位置づけることを目的とする。特に本センターおよびプロジェクトの基幹的理念である建学の精神「浄土真宗の精神」を基軸としつつ、日本仏教の思想基盤というべき南都・北嶺に展開した仏教を多面的・総合的にとらえる「南都学」・「北嶺学」の構築を目指すとともに、前近代日本における仏教的世界観を解明する。本ユニットは以下の3つのサブユニットから成る。

サブユニット1では、建学の精神である浄土真宗を開頭した親鸞浄土教に関し、その思想が最も体系的にあらわされた『教行信証』の研究を行う。これは川添・杉岡・玉木・高田（文）による浄土真宗ならびに親鸞に関する一連の研究成果を活用して推進されるものである。

我が国における仏教研究は、今日、仏教諸宗派の伝統的な宗学と明治以降の近代的な仏教学との緊密な連携により、新たな地平を開こうとしている。親鸞浄土教の研究もまた、近代以降、一宗派内の研鑽という枠組みを超えて、歴史学・哲学・文学など幅広く諸の学問領域から関心が寄せられて研究が進められ、多くの成果が提出されてきた。一方で、実証的な親鸞研究によって、実に多様な親鸞像が語られるようになった。

そうした中で、本学の真宗学は伝統的な宗学における訓詁註釈的研究の膨大な業績を批判的に継承しつつ、文献学的方法を援用することによって親鸞浄土教の研究を進め、主体的かつ客観的に親鸞が体験し開頭した仏教、浄土真宗の真理性を探究してきた。本サブユニットは、こうした研究方法とその成果を十分に踏まえ、親鸞の主著『教行信証』を研究するものである。

『教行信証』研究において、近年、注目されるのが、東・西本願寺と高田専修寺を中心に、本書の書誌学的研究に関する最新の研究書の出版が相次いだことで、親鸞浄土教の解明に大きく寄与するものとなっている。しかしながら、未だ明らかでない問題も多く、本書古写本の伝承に関する研究は十分でない。また本書の文献解釈学的な研究も、なお発展途上の段階である。そこで本サブユニットでは、本書の貴重な古写本である本学図書館所蔵の文明二年本を中心に据えて、同本の系統・流伝等を明らかにするとともに、『教行信証』の思想的意義の更なる解明に向けた総合的な視野からの研究を行い、その成果を公刊する。

サブユニット2では、「写字台文庫」（西本願寺第23世門主大谷光照師からの基金によって収集された資料からなる貴重書の宝庫）など古代・中世から近世にいたる貴重な古典籍群を有する龍谷大学図書館所蔵文献などの古写本資料を中心に、南都と北嶺における仏教教理・儀礼・図像・歴史・地理・自然環境等の総合的検討を通して、現代に続く日本仏教の「学問知」の形成と展開を明らかにする。楠・藤丸による南都諸寺所蔵写本類の研究、道元による叡山浄土教研究、土屋による叡山植生の研究、長谷川の中国唯識研究、蓑輪による教理と儀礼両面からの日本仏教研究、宮治・入澤による図像学研究、の成果を活かして遂行される。

長きにわたる本学の仏教学研究は、俱舎学・唯識学・華嚴学・天台学という枠組みのなかで、豊富な収蔵資料をもとに展開されてきた。この伝統の上に立ち、「南都学」「北嶺学」の名のもと、新たな視点に立って研究を再構築・新展開させるべき時期にきている。

具体的には、朝廷や貴族によって主催された儀礼空間である「論義法会」に着目し、そこで展開された「法相」「華嚴」「天台」「律」の各宗における教理問答の実態について、従来十分に解明されてこなかった古写本資料の翻刻・解読研究を中心とする。なかでも諸宗の教学交渉・論争などによって構築された共時的な教理思想の形成や、南都・比叡山という地勢学的な位置づけについても留意し、多面的・総合的な考察を行う。とくに比叡山については、貴重な原生林が残り歴史的にも山林の保全が行われてきたが、それらの植物生態学的な解明は比叡山に伝存する植栽関連文書との関係のなかで明らかにすることが可能である。そうした文理融合的な視点を加味した研究を推進する。

サブユニット3では、仏教系世界図と『混一疆理歴代国都之図』（以下、『混一図』と略する）に基づき、仏教的世界観から現実の世界像認識への道程について検証する。村岡・渡邊による一連の『混一図』研究の成果が活用されることとなる。

本学図書館に所蔵される、15世紀に李氏朝鮮で作製された『混一図』は、現存する最古の世界地図の一つであるが、東アジアではそれより古くから仏教的世界観を表す世界図が作られていた。そのような仏教系世界図は、現実の世界像が知られてくるようになると、図の中に部分的であるが、それが反映されるようになり、ついには現実の世界をほぼ正確に表す地図が登場してくる。『混一図』は、仏教系世界図が現実世界の地図に移行する最初期の地図という側面もあり、両者のかかわりは、それらが伝わった近世以降の日本においても大きな課題であった。こうした課題をふまえ、本サブユニットでは、両者の比較検討を行い、地図に表された仏教的世界観から現実の世界像認識への道程を検討する。なお、デジタルアーカイブの協力の下に『混一図』をはじめとする古地図の高解像度のデジタル画像を作成し、研究を進めるとともに、成果の公開を図る。

## (2) 平成31年度のユニットの具体的な研究内容

(調書様式III-2「年度別の具体的な研究内容（【平成31年度】の当該ユニット部分）」)

### 【グループ1ユニットAの計画】

『教行信証の総合的研究』（仮）の刊行に向けてユニットの研究成果をまとめ、各員が研究論文を作成する（サブユニット1）。前年度に引き続き、南都・北嶺における論義資料を調査し、「法相」「華嚴」「天台」などの各宗における教理問答の展開を明らかにする。比叡山の植生に関する生態学的な調査、および叡山文庫所蔵の山林保全関係文書の翻刻・解読研究の成果を公開する。汎アジア的視点からの日本仏教図像の研究を推進する（サブユニット2）。ワークショップ「仏教系世界図と前近代の世界認識」（仮）を開催する。龍谷ミュージアムなどで、本ユニットの研究成果を社会に発信・還元する。『仏教系世界図と前近代の世界認識』（仮）を公刊する（サブユニット3）。

(3) 平成31年度の進捗状況・研究成果・根拠データ等（プロジェクト全体に関わる活動は除く）

<上記(2)「具体的な研究内容」の進捗状況及び達成度>

(サブユニット1)

- 4年間の活動を踏まえた本ユニットの研究成果は、『国際社会と日本仏教』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書17）に論文、およびエッセイとして掲載した。

(サブユニット2)

- 各宗の教理問答の展開に関する研究成果をまとめ、『日本仏教と論義』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書13）と『日本仏教の展開とその造形』（同15）を刊行した。
- 比叡山の植生に関して、延暦寺を中心とした文献について解説し、社会に公開することを進めた。その成果から展開して、『比叡山の仏教と植生』（龍谷大学アジア仏教文化研究センター文化講演会シリーズ4）を刊行した。
- 汎アジア的視点から日本仏教の図像について考察するために学術講演会を開催した（研究会一覧②）。本講演会では、野口圭也氏が、インド密教から日本密教への展開について思想・美術の両面から分析を試みた。氏によると、インド密教は初期・中期・後期に分類される。初期は未だ体系的でない密教だが、中期になると成仏が主目的となる。日本密教はこの中期に相当する。後期は解脱至上主義の立場をとり、煩惱のエネルギーを悟りに転換する。このような展開を踏まえ、密教の美術について検討が行われた。

(サブユニット3)

- 6月に研究集会を開催し、その研究集会を経て、『最古の世界地図を読む—『混一疆理歴代国都之図』から見る陸と海—』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書16）を刊行した。

<上記(2)以外でユニットとして新規に実施した研究内容の進捗状況及び達成度>

(サブユニット1)

- 総合的な視野から『教行信証』の思想的意義を解明し、その成果を公開するために、龍谷大学世界仏教文化研究センター親鸞浄土教総合研究班との共催でセミナーを開催した（研究会一覧③）。本セミナーでは、佐藤弘夫氏が、親鸞の聖徳太子観との関係の中で真宗における神祇観を分析した。この問題は、親鸞の2つの神祇観（神祇不拝・護念）をいかに理解するかという観点から議論されてきたが、氏の分析はそれに新たな視座を提示するもので、本ユニットの『教行信証』化身土巻の研究にも重要な示唆を与えるものであった。
- 研究成果をまとめ、『顕浄土真実教行証文類』（龍谷大学善本叢書34）に論文を寄稿した。

(サブユニット2)

- 宗教文化遺産に対する理解を深めるため、国内シンポジウムを開催した（研究会一覧①）。
- 本ユニットの研究成果に関連する原稿を『国際社会と日本仏教』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書17）に寄稿した。

(サブユニット3)

特になし。研究計画どおりの事業が実施された。

<問題点（実施できなかった研究を含む）>

(サブユニット1)

- 刊行予定であった『教行信証の総合的研究』（仮）については、上記『顕浄土真実教行証文類』と『国際社会と日本仏教』に掲載の研究成果と内容的に重複することから刊行を取りやめた。

(サブユニット2)

- 特になし。研究計画どおりの事業が実施された。

(サブユニット3)

- ワークショップ「仏教系世界図と前近代の世界認識」(仮)については、報告者との日程が合わず開催に至らなかったが、令和元年度に入ってから上記の龍谷大学アジア仏教文化研究叢書の執筆者と密に連絡を取り、6月に研究集会を開いて出版に向けて準備を開始した。
- 社会への発信・還元の間として、龍谷大学大宮学舎本館で『混一疆理歴代国都之図』復元図の展示を予定したが、貴重な文化財であることから日程調整が上手くいかず、展示はできなかった。しかし、上記のアジア仏教文化研究叢書で復元図の最も解像度の高いデータを提示し、最新の研究成果を掲載したことなどで、社会への発信・還元は達成できたと考えている。

## 平成31年度ユニット研究活動の根拠データ

### <ユニット研究会一覧>

#### ①2019年度 第1回 国内シンポジウム

■テーマ：宗教文化遺産を探る・記す・保つ—宗教テキスト・アーカイブス学術共同体の創成と実践—

■開催日時：2020年2月23日(日) 13:30～16:30

■場所：龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室

■報告者・報告題目：

阿部泰郎(龍谷大学教授)

「趣旨説明：地域における宗教テキスト文化遺産探査研究の現在」

小池淳一(国立歴史民俗博物館研究部教授)

「文字資料の歴史民俗学的探究—会津の聖教・典籍調査から—」

瀬谷貴之(神奈川県立金沢文庫主任学芸員)

「金沢文庫特別展と称名寺聖教—運慶・聖徳太子・貞慶—」

大河内智之(和歌山県立博物館主任学芸員)

「宗教文化遺産の維持・共有と地域社会—和歌山の事例から—」

■コメンテーター：近本謙介(名古屋大学教授)

■司会：阿部泰郎(龍谷大学教授)

■参加者：16人

#### ②2019年度 第1回 学術講演会

■報告題目：密教の思想と美術

■開催日時：2020年1月9日(木) 10:45～12:15

■場所：龍谷大学大宮学舎東翼101教室

■報告者：野口圭也(大正大学教授)

■コメンテーター：楠 淳澄(龍谷大学教授)

■司会：藤丸 要(龍谷大学教授)

■参加者：200人

#### ③2019年度 第1回 セミナー

■報告題目：親鸞における本地垂迹と神祇不拝

■開催日時：2020年1月29日(水) 13:15～15:00

- 場所 : 龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室
- 報告者 : 佐藤弘夫 (東北大学名誉教授)
- コメンテーター : 杉岡孝紀 (龍谷大学教授)
- 司会 : 玉木興慈 (龍谷大学教授)
- 参加者 : 35人
- 共催 : 龍谷大学世界仏教文化研究センター親鸞浄土教総合研究班

#### <ユニット関係ワーキングペーパー一覧>

本年度は該当なし。

#### <ユニット研究において協力を得た学外機関・研究者一覧>

- ①小池淳一 (国立歴史民俗博物館研究部教授) 【第1回 国内シンポジウム】
- ②瀬谷貴之 (神奈川県立金沢文庫主任学芸員) 【第1回 国内シンポジウム】
- ③大河内智之 (和歌山県立博物館主任学芸員) 【第1回 国内シンポジウム】
- ④近本謙介 (名古屋大学教授) 【第1回 国内シンポジウム】
- ⑤野口圭也 (大正大学教授) 【第1回 学術講演会】
- ⑥佐藤弘夫 (東北大学名誉教授) 【第1回 セミナー】

#### <ユニット研究費 (個人分担金含む) による調査一覧>

本年度は該当なし。

## 平成 31 年度 グループ 1 ユニット B 研究進捗状況

三谷真澄（ユニットリーダー，龍谷大学国際学部教授）

### (1) プロジェクトにおけるユニットの研究内容

（調書様式Ⅲ-1「②研究内容」とⅢ-2「全年度に亘る」の当該ユニットの部分）

#### 調書様式Ⅲ-1「②研究内容」

グループ 1 ユニット B は，明治期から十五年戦争期までの日本の仏教者が，帝国主義と植民地主義を思想的背景とする国家間の覇権争いが次第に激化していく当時の国際社会のなかで，他国の仏教者（宗教者）や研究者らといかなる相互交流を行い，国家間の対立を超えた連帯や思想を築きえたのか，その実態を明らかにする。

#### 調書様式Ⅲ-2「全年度に亘る」（平成 27 年度欄の初め）部分

##### グループ 1 ユニット B 「近代日本仏教と国際社会」

本ユニットは，明治期から十五年戦争期までの日本の仏教者が，帝国主義と植民地主義を思想的背景とする国家間の覇権争いが次第に激化していく当時の国際社会のなかで，他国の仏教者（宗教者）や研究者らといかなる相互交流を行い，国家間の対立を超えた連帯や思想を築きえたのか，その実態を明らかにする。本ユニットは以下の 3 つのサブユニットから構成される。赤松・龍溪・中西・吉永・ジャフィ・林・岩田による一連の研究成果にもとづいて進められる。

サブユニット 1 では，明治仏教の国際化の展開を解明する。具体的には，本学の前身である普通教校（明治 18 年（1885）創立）の教職員を中心として 1888 年に設立された海外宣教会が，年 1 回発行し国外の 200 ヶ所以上の研究機関や図書館に無料で送付していた英文仏教雑誌『亜細亜之宝珠（Bijou of Asia）』の内容分析を行う。また，西洋諸国の宗教思想や文化と接触した明治の仏教者が，他者としてのキリスト教との相互交渉をとおして，いかなる自己認識の変化を被ったのかを，世界の諸宗教を包摂する「宗教（religion）」概念の構築過程とも関連させながら検討する。

サブユニット 2 では，十五年戦争期における日本の仏教者の活動について考察する。日本が国際連盟を脱退（1933 年 2 月）し国際的に孤立するなか，日本仏教の関係者たちは，欧米の仏教者・研究者との連絡の緊密化を図り，またアジア諸国の仏教勢力との多面的な協力提携を目指した。それは国策に寄り添いながらも国家の意向には必ずしも回収されない，非常に多様な事業として推進された。これらの事業に関わる資料は，散逸も著しく，保存状況も万全とは言えない状況にある。本サブユニットでは，一連の事業に関係した資料の復刊を期するとともに，戦時下日本の仏教者による国際交流活動の実態を解明する。また同時に，そうした国際的な事業が，既に研究蓄積の厚い「戦時教学」のような同時代の仏教者による国家奉献的な運動とどのような関係にあったのかを検討することで，戦時下における日本仏教の実態を総合的に解明する。

サブユニット 3 では，大谷光瑞の思想と事業の再検証を行う。能仁・三谷・市川のこれまでの研究実績を活かして遂行されるものである。大谷光瑞（1876-1948）は，大正から昭和の激動の時代，特に戦中戦後を経験した貴重な歴史的証人である。彼は浄土真宗本願寺派の第 22 世宗主であるとともに，日本史上唯一の組織的な中央アジア探検である，大谷探検隊を派遣した人物として知られる。だが，彼の多面性はそれだけにとどまらない。光瑞は，収集資料の研究調査を行う光寿会を主宰し



たという点では「研究者」でもあり、武庫仏教中学の創設や大谷学生の選抜という点では「教育者」でもあり、さらには、ジャワ、トルコ等での産業開発という点では「実業家」でもあった。本サブユニットでは、彼のそうした様々な側面を再検証しつつ、特にこれまで比較的なされてこなかった光瑞自身の思想との関連で、国際的規模で遂行された彼の事業活動の歴史的背景や意義を再考する。それによって、光瑞が開拓した独自の国際交流活動の特徴を明らかにする。

## (2) 平成31年度のユニットの具体的な研究内容

(調書様式III-2「年度別の具体的な研究内容(【平成31年度】の当該ユニット部分)」)

### 【グループ1ユニットBの計画】

5年間のサブユニットの研究成果として、龍谷大学アジア仏教文化研究叢書を出版する。「近代日本仏教と国際社会」をテーマとするシンポジウムを開催する(サブユニット1)。前年度に引き続き、日本仏教者が戦時下に行った国際交流活動の実態を解明し、戦時下の日本仏教の国際交流に関する研究会を開催する。そこから展開する研究業績を公開する。「近代日本仏教と国際社会」をテーマとするシンポジウムを開催する(サブユニット2)。前年度に引き続き、大谷光瑞の活動を総合的に再検証し、国際的規模で遂行した事業活動の歴史的背景や意義を考察する。前年度に開催したシンポジウムについて報告書を出版する。龍谷ミュージアムなどで研究成果を社会に発信・還元する。「近代日本仏教と国際社会」をテーマとするシンポジウムを開催する(サブユニット3)。

## (3) 平成31年度の進捗状況・研究成果・根拠データ等(プロジェクト全体に関わる活動は除く)

### <上記(2)「具体的な研究内容」の進捗状況及び達成度>

(サブユニット1)

- 5年間の研究成果として、嵩満也、吉永進一、碧海寿広の3名が共同編著となり、法蔵館から『日本仏教と西洋世界』(龍谷大学アジア仏教文化研究叢書12)を出版した。
- 近代日本仏教とインドの関係・交流に関する国際研究会を開催した(研究会一覧①)。デューク大学教授のリチャード・ジャフィ(Richard Jaffe)氏を招聘し、氏が最近出版した *Seeking Śākyamuni: South Asia in the Formation of Modern Japanese Buddhism* (University of Chicago Press, 2019)の内容を中心に、19世紀末から20世紀初頭にかけて南方アジアが日本仏教との重要な接触域としてどう発展し、日本との経済的交渉が、日本人の巡礼や仏教聖地における学びをどのように育んだかを中心に講演が行われた。本会には学内外から国際的な参加者が集い、活発な議論が交わされ、本サブユニットの研究活動の最後を飾るにふさわしい内容になった。

(サブユニット2)

- 「戦時下「日本仏教」の国際交流」研究班に所属する研究員が、研究・調査活動を通じて明らかとなった点をまとめた解説論文を中心に、刊行資料集の雑誌総目次を加え、『論集 戦時下「日本仏教」の国際交流』(龍谷大学アジア仏教文化研究叢書11)として刊行した。
- 戦時下の日本仏教の国際交流に関するセミナーを開催した(研究会一覧②)。大阪大学教授の村上忠良氏が、「仏教交流の実相への視座—タイと日本の関係より—」と題する研究発表を行った後、林行夫の司会で参加者全員による総合討論会が行われた。
- 日本と東南アジアの仏教の交流に関するセミナー(研究総括集会)を開催した(研究会一覧③)。
- 2年で廃刊となったが、『欧米之仏教』は近代日本仏教の国際化のはじまりを告げる貴重な雑誌であり、清沢満之以前の大谷派の教団改革運動の動向を知る上でも不可欠な資料である。本誌の復刻版に解説論文と総目次を付し、龍谷大学アジア仏教文化研究叢書10として刊行した。

(サブユニット3)

- 2018年度に実施した国際シンポジウム「大谷光瑞師の構想と居住空間」に基づく報告書として、『大谷光瑞の構想と居住空間』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書14）を刊行した。
- 龍谷ミュージアムの企画展「龍谷の至宝—時空を超えたメッセージ—」が開催されるにあたり、大谷探検隊が持ち帰った資料の中から選りすぐりの「至宝」を選定し、その一部が展示された。
- 上記企画展と関連して法蔵館より出版された『時空を超えたメッセージ—龍谷の至宝—』（2019年7月）の一部執筆を担当した。

#### <上記（2）以外でユニットとして新規に実施した研究内容の進捗状況及び達成度>

（サブユニット1）

- 特になし。研究計画どおりの事業が実施された。

（サブユニット2）

- 特になし。研究計画どおりの事業が実施された。

（サブユニット3）

- 青木文教と多田等観の著作や記述、また当時の国際状況を中心とする大谷光瑞とチベットの問題に関して、能仁正顕が、2019年10月26日に北京・中国蔵学研究中心で開催された研討会において、「日本におけるチベット学研究の歩みと多田等観」と題する研究発表を行った。
- 2019年10月19日に、龍谷大学大宮学舎で開催された日本西藏（チベット）学会の第67回大会に協賛し、「青木文教・多田等観—チベットに学んだ先人の軌跡」と題するミニ展示会を大宮学舎本館展覧室で開催した。展示内容に関しては、龍谷大学図書館所蔵資料について、本学世界仏教文化研究センター基礎研究部門や古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センターとも連携し、展示品選定に協力したほか、研究成果に基づく画像資料等も展示できた。

#### <問題点（実施できなかった研究を含む）>

（サブユニット1）

- 特になし。研究計画どおりの事業が実施された。

（サブユニット2）

- 2020年3月15日に開催予定であったBARCのこれまでの活動を総括する国際シンポジウム「国際社会と日本仏教」をもって、「近代日本仏教と国際社会」をテーマとするシンポジウム「戦時下「日本仏教」の国際交流」にかえるつもりであったが、新型肺炎の世界的流行の影響でそれができなかった。

（サブユニット3）

- 『大谷光瑞全集』等の記述を中心とする大谷光瑞の思想と具体的事業の検証に関しては、2019年度が過年度の研究成果の総括と位置づけられるため、実施できなかった。
- 2020年3月15日に開催予定であったBARCのこれまでの活動を総括する国際シンポジウム「国際社会と日本仏教」をもって、「近代日本仏教と国際社会」をテーマとするシンポジウムにかえるつもりであったが、新型肺炎の世界的流行の影響でそれができなかった。

#### 平成31年度ユニット研究活動の根拠データ

##### <ユニット研究会一覧>

①2019年度 第1回 研究会

■報告題目：日・印仏教交流と仏教の近代化

■開催日時：2019年12月11日（水）17:00～19:00

■場所：龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室

■報告者：リチャード・ジャフィ（デューク大学教授）

- 司会 : 菊川一道 (龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員)
- 参加者 : 25 人
- 共催 : 龍谷大学世界仏教文化研究センター

②2019 年度 第 1 回 セミナー

- 報告題目: 仏教交流の実相への視座—タイと日本の関係より—
- 開催日時: 2019 年 10 月 11 日 (金) 15:00~18:00
- 場所 : 龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者 : 村上忠良 (大阪大学教授)
- 司会 : 林 行夫 (龍谷大学教授)
- 参加者 : 24 人
- 共催 : 龍谷大学世界仏教文化研究センター仏教史・真宗史総合研究班

③2019 年度 第 2 回 セミナー (研究総括集会)

- テーマ : 「日本と東南アジアの仏教交流」
- 開催日時: 2020 年 1 月 24 日 (金) ~25 日 (土)
- 場所 : 龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者・報告題目:

【1 日目】

- 中西直樹 (龍谷大学教授)  
「明治期日本人僧侶の暹羅布教」
- 林 行夫 (龍谷大学教授)  
「石井米雄と日タイ仏教交流」
- 神田英昭 (高野山真言宗僧侶)  
「タイ仏教と日本仏教は対話できるのか?—タイ仏教への掛け橋になる—」
- 清水洋平 (大谷大学非常勤講師, 真宗総合研究所特別研究員)  
「仏教経典をめぐる日タイ交流の史実と現実」

【2 日目】

- 〈午前の部〉
- 伊東利勝 (愛知大学人文社会学研究所)  
「日本とミャンマーの仏教交流にみる「国家と宗教」」
- 藤本 晃 (浄土真宗誓教寺)  
「仏教の交流, 比丘サンガの交流」
- 〈午後の部〉
- 大澤広嗣 (BARC 研究員, 文化庁宗務課)  
「宗教法人制度と東南アジア系の仏教団体」
- コメンテーター:
- 小林 知 (京都大学)
- 村上忠良 (大阪大学)
- 金澤 豊 (龍谷大学)
- 参加者 : 29 人
- 共催 :
- 龍谷大学世界仏教文化研究センター仏教史・真宗史総合研究班
- 龍谷学会

<ユニット関係ワーキングペーパー一覧>

- ①大澤広嗣「台湾総督府外事部の調査活動と龍谷大学出身の天津慈雲」

＜ユニット研究において協力を得た学外機関・研究者一覧＞

- ①リチャード・ジャフィ（デューク大学教授）【第1回 研究会】
- ②村上忠良（大阪大学教授）【第1回 セミナー】【第2回 セミナー】
- ③神田英昭（高野山真言宗僧侶）【第2回 セミナー】
- ④清水洋平（大谷大学非常勤講師，真宗総合研究所特別研究員）【第2回 セミナー】
- ⑤伊東利勝（愛知大学人文社会学研究所）【第2回 セミナー】
- ⑥藤本 晃（浄土真宗誓教寺）【第2回 セミナー】
- ⑦小林 知（京都大学）【第2回 セミナー】

＜ユニット研究費（個人分担金含む）による海外調査一覧＞

本年度は該当なし。

## 平成 31 年度 グループ 2 ユニット A 研究進捗状況

若原雄昭 (ユニットリーダー, 龍谷大学文学部教授)

### (1) プロジェクトにおけるユニットの研究内容

(調書様式Ⅲ-1「②研究内容」とⅢ-2「全年度に亘る」の当該ユニットの部分)

#### 調書様式Ⅲ-1「②研究内容」

グループ 2 ユニット A は、現代における日本仏教の社会性と公益性について、日本における仏教者・教団による社会貢献活動の実態とその意義や、各宗派による現代的な諸問題への取り組み、地域社会における寺院の役割といった観点から考察する。またこうした日本仏教の現状に関する理解を深めるためにも、現代アジア諸地域における仏教の社会性・公益性に関する調査・研究を推進し、日本仏教の事例との比較考察を行う。

#### 調書様式Ⅲ-2「全年度に亘る」(平成 27 年度欄の初め) 部分

##### グループ 2 ユニット A「現代日本仏教の社会性・公益性」

本ユニットでは、現代における日本仏教の社会性と公益性について、日本における仏教(者・教団)による社会貢献活動の実態とその意義や、各宗派による現代的な諸問題への取り組み、地域社会における寺院の役割といった観点から考察する。またこうした日本仏教の現状に関する理解を深めるためにも、現代アジア諸地域における仏教の社会性・公益性に関する調査・研究を推進し、日本仏教の事例との比較考察を行う。嵩・藤・若原・岡本・長上・野呂・ロウの研究業績を踏まえて推進される。

サブユニット 1 では、日本仏教の社会性と公益性を問い直す。日本の仏教研究は、教義や歴史の分野では、国際的にも評価の高い実証的な研究成果をあげてきた一方、同時代の眼前に存在する日本仏教の有する社会性・公益性については、十分な議論がなされてこなかった。しかし近年、特に東日本大震災以降、海外の日本仏教の研究者の間では「宗教の社会性・公益性」という観点から、あらためて現代日本仏教の公的な役割が再検討されつつある。本サブユニットでは、国外の研究者の日本仏教に対する評価にも耳を傾けながら、「日本仏教の社会性・公益性」について考察する。

具体的には、現在全国各地で展開されている仏教系 NGO・NPO の活動実態を調査するとともに、各組織の代表者を集めたセミナー等を開催し、それぞれの活動の現況や共通の課題を確認した上で、課題解決のための方途を模索する。また、葬儀の意義やあり方などの現代的諸問題に対する宗派の対応や、寺院・僧侶による宗教活動の公益性等に関する調査・研究をこれまで積み重ねてきた各宗派の研究機関と連携し、共同的な研究を推進する。なお、これらの仏教系 NGO・NPO や宗派の研究機関は、異なる宗派間の壁のために、これまで宗派を超えた持続的な協力関係を十分に築けずにはきたが、本プロジェクトでは本サブユニットを中心にして、そのような宗派間の壁を超えた日本仏教研究のプラットフォームの形成を目指す。さらに、こうした宗派的な立場ではなく、地域社会における寺院という観点から日本仏教の現状を調査している国内外の研究者からも、現代日本仏教の課題と可能性についての知見を得ていく。

サブユニット 2 では、現代のアジア諸地域における仏教者のさまざまな活動や社会的役割について調査・研究し、それらとの比較考察によって現代日本仏教の社会性・公益性の特質を浮き彫りにする。

例えば現代インドでは、アンベードカルに端を発する改宗仏教徒が次第に大きな勢力となっており、下層民を主体としたその運動がインド社会の差別構造を乗り越えるための実践を続けている。バングラデシュでは、同国におけるマイノリティである仏教徒が圧倒的多数派のイスラム教徒と相互交渉しつつ平和的に共存するという興味深い一面がみられる。タイでは、タイ仏教独特の一時出家制度が僧院と社会との密接な関係性の維持・構築に貢献している。近隣の東アジア地域においても、例えば現在の韓国では、仏教が社会救済・慈善・文化事業などを通じた伝道・布教を熱心に展開している。台湾でも、僧侶による積極的な社会奉仕活動や教育事業がみられるが、そこでは特に尼僧たちによる活躍が著しい。

こうしたアジア諸地域の仏教者による諸活動の動向を現地調査によって把握し、欧米の仏教研究の分野において近年活況を呈している「エンゲイジド・ブディズム（社会参加型仏教）」という視点からこれらの動向を理論的に分析し、得られた知見に基づき日本仏教の現状理解を深める。すなわち、仏教の社会性・公益性に関して、日本の現状分析、アジア諸地域の事例、および欧米の「エンゲイジド・ブディズム」論という三点観測的なアプローチから検討する。こうした従来になかった新しい研究手法によって、最終的に現代日本仏教の特徴を明確にしていく。

## (2) 平成31年度のユニットの具体的な研究内容

(調書様式Ⅲ-2「年度別の具体的な研究内容（【平成31年度】の当該ユニット部分）」)

### 【グループ2ユニットAの計画】

シンポジウム「現代日本仏教の社会性・公益性」（仮）を開催する。『現代日本仏教の社会性・公益性』（仮、ユニット全体）を刊行する（サブユニット1）。現代アジア諸地域の仏教者の様々な活動を現地調査し、「エンゲイジド・ブディズム」という視点から理論的に分析する、また、日本仏教の現状を分析するといったこれまでの研究活動をまとめ、その成果を龍谷大学アジア仏教文化研究叢書に掲載する（サブユニット2）。

## (3) 平成31年度の進捗状況・研究成果・根拠データ等（プロジェクト全体に関わる活動は除く）

### <上記(2)「具体的な研究内容」の進捗状況及び達成度>

(サブユニット1)

- 『現代日本仏教の社会性・公益性』（仮）のかわりに、『国際社会と日本仏教』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書17）に竹本了悟、野呂靖等による自死問題関連の原稿を掲載し、本ユニットの成果発刊とした。

(サブユニット2)

- これまでの研究成果に関連した原稿を『国際社会と日本仏教』（同17）に寄稿した。

### <上記(2)以外でユニットとして新規に実施した研究内容の進捗状況及び達成度>

(サブユニット1)

- 東アジア仏教思想史の構築をテーマとする国際シンポジウムを開催した（研究会一覧①）。

(サブユニット2)

- タイ国タンマガーイ仏教研究所教授のコンカーラトナラク・プラポンサク氏を招聘し、変容するタイの仏教社会をテーマとする学術講演会を開催した（研究会一覧②）。
- 潔兮傑舞団団長の樊潔兮氏を招聘し、観音菩薩の信仰とも深く関係する中国の媽祖信仰をテーマとする学術講演会を開催した（研究会一覧③）。

<問題点（実施できなかった研究を含む）>

（サブユニット1）

- 2020年3月15日に開催予定であったBARCの活動を総括する国際シンポジウム「国際社会と日本仏教」をもって、シンポジウム「現代日本仏教の社会性・公益性」（仮）にかえるつもりであったが、新型コロナウイルスの世界的流行の影響でそれができなかった。

（サブユニット2）

- 特になし。研究計画どおりの事業が実施された。

平成31年度ユニット研究活動の根拠データ

<ユニット研究会一覧>

①2019年度 第1回 国際シンポジウム

■テーマ：東アジア仏教思想史の構築—凝然・明恵と華嚴思想—

■開催日時：2019年12月14日（土）～15日（日）

■場所：龍谷大学大宮学舎東翼302教室

■報告者・報告題目：

【1日目：凝然と東アジア仏教】

〈特別講演〉

横内裕人（京都府立大学教授）

「鎌倉中期の対外関係と宗教環境—宋仏教の移入と相克—」

〈午前の部〉

張文良（中国人民大学教授）

「中国における凝然仏教思想の受容—中国仏教宗派説を中心に—」

岡本一平（慶應義塾大学非常勤講師）

「示観房凝然の浄土教史論—東アジア仏教思想史の構築に向けて—」

〈午後の部〉

王頌（北京大学教授）

「凝然の「十世隔法異成門」解釈」

成昊官（暁山）（東国大学校博士課程）

「凝然の五教章通路記における智儼引用について」

朴普藍（忠北大学校助教授）

「凝然の六相説の理解について」

中西俊英（東大寺華嚴学研究所研究員）

「「初発心時便成正覚」の思想史的考察—凝然の解釈の位置づけを中心に—」

藤丸要（龍谷大学教授）

「華嚴観法と凝然」

大谷由香（龍谷大学講師）

「東アジアにおける南山宗教義の趨勢と凝然」

【2日目：明恵と東アジア仏教】

金天鶴（東国大学校教授）

「明恵の『解脱門義』における信と住の関係」

野呂靖（龍谷大学准教授）

「明恵の成仏義解釈とその周辺—義天版章疏の影響関係を中心に—」

前川健一（創価大学教授）

「『明恵上人行状』の中の明恵像」

西谷功（泉涌寺心照殿学芸員）

「明恵撰『涅槃講式』成立の背景—俊苧請来の宋代涅槃儀礼の視点から—」

■司会：

藤丸要（龍谷大学教授）

野呂靖（龍谷大学准教授）

亀山隆彦（龍谷大学非常勤講師，アジア仏教文化研究センター博士研究員）

■通訳

李 慈郎（東国大学校教授）

金 龍泰（東国大学校教授）

李 曼寧（龍谷大学世界仏教文化研究センターRA, 客員研究員）

■共催 :

龍谷大学世界仏教文化研究センター

東国大学校仏教文化研究院 HK 研究団

中国人民大学仏教與宗教学理論研究所

中央人民大学哲学與宗教学学院

■参加者 : 80 人

②2019 年度 第 1 回 学術講演会

■報告題目: 変容するタイ仏教社会

■開催日時: 2019 年 10 月 17 日 (木) 13:15~14:45

■場所 : 龍谷大学大宮学舎本館 2 階講堂

■報告者 : コンカーラトナラク・プラボンサク (タイ国タンマガーイ仏教研究所教授)

■司会 : 若原雄昭 (龍谷大学教授)

■参加者 : 50 人

③2019 年度 第 2 回 学術講演会

■報告題目: 媽祖と観音

■開催日時: 2019 年 11 月 14 日 (木) 13:15~14:45

■場所 : 龍谷大学大宮学舎本館 2 階講堂

■報告者 : 樊 潔兮 (潔兮傑舞団団長)

■司会 : 若原雄昭 (龍谷大学教授)

■参加者 : 30 人

<ユニット関係ワーキングペーパー一覧>

本年度は該当なし。

<ユニット研究において協力を得た学外機関・研究者一覧>

①横内裕人 (京都府立大学教授) 【第 1 回 国際シンポジウム】

②張 文良 (中国人民大学教授) 【第 1 回 国際シンポジウム】

③岡本一平 (慶應義塾大学非常勤講師) 【第 1 回 国際シンポジウム】

④王 頌 (北京大学教授) 【第 1 回 国際シンポジウム】

⑤成昊官 (暁山) (東国大学校博士課程) 【第 1 回 国際シンポジウム】

⑥朴 普藍 (忠北大学校助教授) 【第 1 回 国際シンポジウム】

⑦中西俊英 (東大寺華嚴学研究所研究員) 【第 1 回 国際シンポジウム】

⑧金 天鶴 (東国大学校教授) 【第 1 回 国際シンポジウム】

⑨前川健一 (創価大学教授) 【第 1 回 国際シンポジウム】

⑩李 慈郎 (東国大学校教授) 【第 1 回 国際シンポジウム】

⑪金 龍泰 (東国大学校教授) 【第 1 回 国際シンポジウム】

⑫コンカーラトナラク・プラボンサク (タイ国タンマガーイ仏教研究所教授) 【第 1 回 学術講演会】

⑬樊 潔兮 (潔兮傑舞団団長) 【第 2 回 学術講演会】

<ユニット研究費 (個人分担金含む) による調査一覧>



本年度は該当なし。

## 平成31年度 グループ2ユニットB 研究進捗状況

那須英勝（ユニットリーダー、龍谷大学文学部教授）

### (1) プロジェクトにおけるユニットの研究内容

（調書様式Ⅲ-1「②研究内容」とⅢ-2「全年度に亘る」の当該ユニットの部分）

#### 調書様式Ⅲ-1「②研究内容」

グループ2ユニットBは、「多文化共生」が求められる現代社会において日本仏教が直面する課題を明らかにするために、宗教間対話、宗教間教育、現代日本仏教とジェンダーに関する研究を行う。

#### 調書様式Ⅲ-2「全年度に亘る」（平成27年度欄の初め）部分

グループ2ユニットB「多文化共生社会における日本仏教の課題と展望」

本ユニットは、「多文化共生」が求められる現代社会において日本仏教が直面する課題を明らかにするために、宗教間対話、宗教間教育、現代日本仏教とジェンダーに関する研究を行う。高田・那須・小原・ウィリアムズ・本多による研究成果を活用して遂行される。

グローバルなレベルで宗教多元化が進み、「多文化共生社会」と呼ばれる現代社会においては、「宗教間対話」（Inter-faith Dialogue）もかつてのように特殊な機会にのみ必要なものではなくなりつつある。また宗教思想の持つ普遍的特質は、信仰や文化を異にする者との対話を通して、多元的な価値観を持つ新たな主体や表現様式を育成していく。本ユニットでは、日本仏教における宗教間対話の先蹤ともいべき「宗論」の歴史と伝統をふまえつつ、仏教思想の持つ普遍性を、「宗教的真理の多義性」と「信仰の多様性」といった視点から再検討し、多文化共生社会における宗教間対話と相互理解の可能性を探る。

宗教間対話の必要性への認識が高まりつつあるなかで、宗教間対話の基盤としての「宗教間教育」（Inter-faith Education）の実践は、現在、欧米を中心に世界の諸地域において、当該地域の文化・社会状況の特徴をふまえながら、様々な取り組みがなされている。これに対して、日本における宗教間教育の実践は、まだまだ発展途上の段階にあるのが現状である。本ユニットでは、国際的なコンテキストで実践される宗教間教育の場において、日本仏教がどのような評価をうけているのか検討し、また宗教間教育の実践に日本仏教がどのように貢献できるのか、その可能性を探る。

また、諸宗教間のグローバルな交流が進むなか、日本の女性仏教徒も、伝統的な宗派の垣根を越え、国境を越えた活動を展開しつつある。日本の伝統教団においても女性仏教徒は僧侶、寺族、各種教化団体構成員など多面的に存在するが、国際的な場面において女性が主体的に活動範囲を拡大していく動きがある一方で、伝統教団の内部では周辺化されがちであるという不均衡な状況が見られる。このような現状をふまえつつ、本研究ユニットでは、従来の男性僧侶の活動に偏った仏教研究に対する反省から、近年の宗教研究において重要視されているジェンダーの視点を取り入れた上で、女性の仏教徒の活動に焦点を当て「越境する日本の女性仏教徒」の実像に迫って行く。

### (2) 平成31年度のユニットの具体的な研究内容

（調書様式Ⅲ-2「年度別の具体的な研究内容（【平成31年度】の当該ユニット部分）」）

#### 【グループ2ユニットBの計画】

多文化共生社会における宗教間対話の場における日本仏教の持つ可能性と課題の提示を目的に、学術講演会を開催する。

(3) 平成31年度の進捗状況・研究成果・根拠データ等（プロジェクト全体に関わる活動は除く）

＜上記（2）「具体的な研究内容」の進捗状況及び達成度＞

- 多文化共生社会における宗教間対話の場における日本仏教の持つ可能性と課題の提示を目的に、スイス・ベルン大学教授のイエンス・シュリーター（Jens Schlieter）氏を招き、学術講演会を開催した（研究会一覧②）。20世紀半ばから、臨死体験というコンセプトが欧米で盛んに取り上げられるようになるが、氏はその中でも『チベット死者の書』に注目し、本書のいかなる要素が上述の動向に影響したか先ず確認した。次に、臨死体験流行の立役者の一人である Raymond Moody の著書に注目し、その分析を通じて臨死体験という概念の大まかな内容と形成プロセス、さらに Moody の分析方法や論拠について議論を試みた。

＜上記（2）以外でユニットとして新規に実施した研究内容の進捗状況及び達成度＞

- クィア仏教学をテーマとする研究会を開催した（研究会一覧①）。
- 研究成果に関連する原稿を『国際社会と日本仏教』（アジア仏教文化研究叢書17）に掲載した。

＜問題点（実施できなかった研究を含む）＞

- 特になし。研究計画どおりの事業が実施された。

平成31年度ユニット研究活動の根拠データ

＜ユニット研究会一覧＞

①2019年度 第1回 研究会

- 報告題目：クィア仏教学
- 開催日時：2020年3月3日（火）15:00～17:00
- 場所：龍谷大学大宮学舎東翼203教室
- 参加者：7人

②2019年度 第1回 学術講演会

- 報告題目：The Influence of "The Tibetan Book of the Dead" on Near-death Experiences in the West  
（『チベット死者の書』が西洋の臨死体験に与える影響）
- 開催日時：2019年7月29日（月）16:45～18:15
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室
- 報告者：イエンス・シュリーター（ベルン大学教授）
- 司会：那須英勝（龍谷大学教授）
- 通訳：川本佳苗（京都大学東南アジア地域研究研究所連携研究員）
- 参加者：40人

＜ユニット関係ワーキングペーパー一覧＞

本年度は該当なし。

＜ユニット研究において協力を得た学外機関・研究者一覧＞

- ①イエンス・シュリーター（ベルン大学教授）【第1回 学術講演会】
- ②川本佳苗（京都大学東南アジア地域研究研究所連携研究員）【第1回 学術講演会】

＜ユニット研究費（個人負担金含む）による調査一覧＞

本年度は該当なし。

## 平成31年度 研究発表の状況

<雑誌論文>

### グループ1(通時的研究班)・ユニットA:日本仏教の形成と展開

楠 淳證 (センター長)

- ・「貞慶の信仰と仏道—講式を中心として—」『仏教文学』第44号, 2019年4月。

中川 修

- ・「仏神祭祀権の発生と祭祀相続—蘇我氏から律令国家へ—」『龍谷大学考古学論集Ⅲ—岡崎晋明先生喜寿記念論文集—』, 2020年6月予定。
- ・「神崎院と家原寺—行基の伝道とその特質—」『論集古代史攷』, 2020年12月予定。

川添泰信

- ・「他力回向について」『木辺学会』第37号, 2019年5月。
- ・「布教伝道の実践的心得—仏教・真宗と儒教 死者儀礼—」『木辺学会』第37号, 2019年5月。

玉木興慈

- ・「『教行信証』『信巻』三一問答における回施に関する研究ノート—阿弥陀仏は何を回施するのか—」『真宗学』第141・142合併号, 2020年3月。

長谷川岳史

- ・「“盧舎那”与“釈迦”的異同問題—以『梵網經』的佛身解釋為中心—」『華嚴仏身論研究』(陝西師範大学宗教学集刊之二『華嚴研究』第2輯), 2019年8月。

西谷 功

- ・「洛中洛外図屏風に描かれた戒光寺」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』85, 2019年4月。
- ・「鎌倉期東山における宋式寺院という「場」—泉涌寺の宋文化受容の視点から—」『地方史研究』69-4 (400号), 2019年8月。
- ・「祖師像と宋代仏教儀礼—礼讃文儀礼を視座として—」『アジア仏教美術論集 東アジア 4』, 2020年予定。

### グループ1(通時的研究班)・ユニットB:近代日本仏教と国際社会

中西直樹

- ・「明治期日本人僧侶の暹羅布教」『龍谷大学世界仏教文化研究論叢』第58集, 2020年3月。

岩田真美

- ・書評「岩田真美・中西直樹編『仏教婦人雑誌の創刊』」『中外日報』, 2019年4月。
- ・書評「岩田真美・中西直樹編『仏教婦人雑誌の創刊』」『仏教タイムス』, 2019年5月。

- ・「近世における真宗の歴史的研究の先駆—玄智『大谷本願寺通紀』—」『真宗学』第141・142合併号, 2020年3月。

大澤広嗣

- ・「台湾総督府外事部の調査活動と龍谷大学出身の天津慈雲」『龍谷大学アジア仏教文化研究センター2019年度研究報告書』, 2020年3月。

## グループ2(共時的研究班)・ユニットA:現代日本仏教の社会性・公益性

野呂 靖

- ・「義林房喜海の成仏義—高山寺蔵『三生成道料簡』を中心に—」『印度学仏教学研究』第68巻第2号, 2020年3月。

## グループ2(共時的研究班)・ユニットB:多文化共生社会における日本仏教の課題と展望

那須英勝

- ・“Ryogen” Oxford Research Encyclopedia of Religion (オックスフォード大学出版局, The Oxford Encyclopedia of Buddhism オンライン版), 2020年3月。
- ・“Genshin’s Discovery of the Easy Way to Receive Confirmation for Enlightenment in the Present Life”『真宗学』第141・142合併号, 2020年3月。

小原克博

- ・「キリスト教と日本社会の間の葛藤と共鳴——宗教的マイノリティが担う平和主義」『宗教と社会の戦後史』, 2019年4月。
- ・「宗教が平和に貢献するための課題——良心学と統合的平和の視点から」『東洋学術研究』第58巻2号, 2019年11月。

桂 紹隆

- ・「ブッダの教え—これあれば、彼あり。これなければ、彼なし—」『武蔵野大学日曜講演会講演集「心」』38, 2019年。

<図書>

## グループ1(通時的研究班)・ユニットA:日本仏教の形成と展開

楠 淳證 (センター長)

- ・楠 淳證『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究—仏道篇—』, 法蔵館, 全734頁, 2019年7月。
- ・共著(楠 淳證編)『修二会 お水取りと花会式—聖地に受け継がれし伝灯の法会—』(龍谷大学アジア仏教文化研究センター文化講演会シリーズ3), 法蔵館, 全118頁, 2020年1月。
- ・共著(楠 淳證・中西直樹・嵩 満也編)『国際社会と日本仏教』(龍谷大学アジア仏教文化研究叢書17), 丸善出版, 全272頁, 2020年1月。

・共著(楠 淳證・野呂 靖・亀山隆彦編)『日本仏教と論義』(龍谷大学アジア仏教文化研究叢書13), 法蔵館, 全624頁, 2020年2月。

#### 道元徹心

・共著(道元徹心編)『比叡山の仏教と植生』(龍谷大学アジア仏教文化研究センター文化講演会シリーズ4), 法蔵館, 全220頁, 2020年3月。

・共著(道元徹心編)『日本仏教の展開とその造形』(龍谷大学アジア仏教文化研究叢書15), 法蔵館, 全392頁, 2020年3月。

#### 川添泰信

・川添泰信『選択註解鈔講述』, 永田文昌堂, 全491頁, 2019年7月。

#### 玉木興慈

・共著(楠 淳證・中西直樹・嵩 満也編)『国際社会と日本仏教』(龍谷大学アジア仏教文化研究叢書17), 丸善出版, 2020年1月, そのうち「『教行信証』の思想がもつ普遍性—経・論・釈の引用や御自釈に見る表現から—」(48-60頁)を分担執筆。

・共著(龍谷大学世界仏教文化研究センター編)『顕浄土真実教行証文類』(龍谷大学善本叢書34), 永田文昌堂, 2020年2月, そのうち「『教行信証』「信巻」における金剛心の義」を分担執筆。

#### 村岡 倫

・共著(村岡 倫編)『最古の世界地図を読む—『混一疆理歴代国都之図』から見る陸と海—』(龍谷大学アジア仏教文化研究叢書16), 法蔵館, 全302頁, 2020年2月。

#### 西谷 功

・共著(一般財団法人律宗戒学院編)『唐招提寺の伝統と戒律』, 法蔵館, 2019年5月, そのうち「南宋仏教からみた鎌倉期戒律復興運動の諸相」(137-172頁)を分担執筆。

・共著(平成洛陽三十三所観音霊場会・京都府京都文化博物館監修, 長村祥知編)『京都観音めぐり 洛陽三十三所の寺宝』, 勉誠出版, 2019年6月, そのうち「寺宝・資料解説(伝俊苧筆断簡, 渡唐天神像, 象海宗師像, 観音菩薩坐像, 補陀海山円通宝閣額残欠, 泉涌寺再興日並記, 泉涌寺殿堂并什物色目, 長恨歌絵巻)」を分担執筆。

・共著(龍谷大学創立380周年記念書籍編集委員会編)『時空を越えたメッセージ—龍谷の至宝—』, 法蔵館, 2019年7月, そのうち「涅槃図」解説(16-17頁)を分担執筆。

・共著(龍谷大学世界仏教文化研究センター編)『東アジア仏教思想史の構築—凝然・明恵と華嚴思想— 予稿集』, 龍谷大学, 2019年12月, そのうち「明恵撰『涅槃講式』成立の背景—俊苧請来の宋代涅槃儀礼の視点から—」(194-202頁)を分担執筆。

・共著(楠 淳證・中西直樹・嵩 満也編)『国際社会と日本仏教』(龍谷大学アジア仏教文化研究叢書17), 丸善出版, 2020年1月, そのうち「南都・北嶺の祖師忌—東アジア仏教儀礼の視点から—」(37-41頁)を分担執筆。

### グループ1(通時的研究班)・ユニットB:近代日本仏教と国際社会

赤松徹眞

・共著（赤松徹眞編）『近代真宗者の「神社問題」論説集成』（第1回配本，全4巻，第1-4巻），三人社，2019年11月。

中西直樹

- ・共著（中西直樹・川口 淳編）『『欧米之仏教』復刻版—大谷派改革運動と神智学—』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書10），三人社，全464頁，2019年11月。
- ・共著（中西直樹・大澤広嗣編）『論集 戦時下「日本仏教」の国際交流』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書11），不二出版，全292頁，2019年12月。
- ・共著（中西直樹・楠 淳澄・嵩 満也編）『国際社会と日本仏教』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書17），丸善出版，全208頁，2020年1月。

岩田真美

・共著（日本思想史事典編集委員会編）『日本思想史事典』，丸善出版，2020年2月，そのうち「幕末維新期の仏教」を分担執筆。

三谷真澄

・共著（三谷真澄編）『大谷光瑞の構想と居住空間』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書14），法蔵館，全284頁，2020年3月。

林 行夫

- ・共著（東南アジア学会編）『東南アジア文化事典』，丸善出版，2019年10月，そのうち「王権と仏教」（64-65頁），「上座仏教（上座部仏教）」（214-215頁）を分担執筆。
- ・共著（中西直樹・大澤広嗣編）『論集 戦時下「日本仏教」の国際交流』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書11），不二出版，2019年12月，そのうち「第4章 異なる仏教と国際化の虚妄」（121-178頁）を分担執筆。

吉永進一

・共著（嵩 満也・吉永進一・碧海寿広編）『日本仏教と西洋世界』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書12），法蔵館，全366頁，2020年1月。

## **グループ2(共時的研究班)・ユニットA:現代日本仏教の社会性・公益性**

嵩満也

- ・共著（楠 淳澄・中西直樹・嵩 満也編）『国際社会と日本仏教』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書17），丸善出版，2020年1月，そのうち「アジアのエンゲイジド・ブディズムとその可能性」（161-182頁）を分担執筆。
- ・共著（嵩 満也・吉永進一・碧海寿広編）『日本仏教と西洋世界』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書12），法蔵館，全366頁，2020年1月。

若原雄昭

・共著（楠 淳澄・中西直樹・嵩 満也編）『国際社会と日本仏教』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書 17），丸善出版，2020 年 1 月，そのうち「ベンガルの大地に生きる仏教徒たち—イスラームとヒンドゥーのはざままで—」（184-190 頁）を分担執筆。

・共著（若原雄昭編）『インド学チベット学研究』第 23 号，インド哲学研究会，2020 年 3 月。

長上深雪

・共著（楠 淳澄・中西直樹・嵩 満也編）『国際社会と日本仏教』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書 17），丸善出版，2020 年 1 月，そのうち「社会課題に取り組む仏教者—仏教社会事業に注目して—」（191-196 頁）を分担執筆。

野呂 靖

・共著（楠 淳澄・中西直樹・嵩 満也編）『国際社会と日本仏教』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書 17），丸善出版，2020 年 1 月，そのうち「自死をどのような死と捉えるか？—現代仏教者による自死対策と教義理解—」（204-213 頁）を分担執筆。

・共著（楠 淳澄・野呂 靖・亀山隆彦編）『日本仏教と論義』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書 13），法蔵館，全 624 頁，2020 年 2 月。

竹本了悟

・共著（楠 淳澄・中西直樹・嵩 満也編）『国際社会と日本仏教』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書 17），丸善出版，2020 年 1 月，そのうち「アジアの宗教者による自死対策とその課題」（197-204 頁）を分担執筆。

## グループ 2(共時的研究班)・ユニット B: 多文化共生社会における日本仏教の課題と展望

那須英勝

・共著（楠 淳澄・中西直樹・嵩 満也編）『国際社会と日本仏教』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書 17），丸善出版，2020 年 1 月，そのうち「多文化共生社会における日本仏教の可能性—トランスナショナルな視点からの再検討—」（219-241 頁）の「はじめに」（219-221 頁）と「むすび」（239-240 頁）を分担執筆。

小原克博

・共著（山極寿一・小原克博著）『人類の起源，宗教の誕生—ホモ・サピエンスの「信じる心」が生まれたとき』，平凡社，全 221 頁，2019 年 5 月。

廣田デニス

・ Gereon Kopf, *How to Read Shinran*, “The Dao Companion to Japanese Buddhist Philosophy,” Springer, 2019, 415-449.

・ Bret W. Davis, *The Oxford Handbook of Japanese Philosophy*, “Philosophical Dimensions of Shinran’s Pure Land Buddhist Path,” Oxford University Press, 2020, 159-180.

・ Mark Dennis and Darren Middleton, *Navigating Deep River: New Perspectives on Shūsaku Endō’s Final Novel*, “Japanese Sensibility and Transcendence in Deep River,” State University of New York Press, 2020, Forthcoming.



<学会発表>

**グループ1(通時的研究班)・ユニットA:日本仏教の形成と展開**

長谷川岳史

・「仏教の哲学・宗教視点による治療論」, 第26回多文化間精神医学会学術総会, 2019年11月, 龍谷大学。

西谷 功

・「羅漢さんの住む世界—羅漢図とその儀礼」, 香雪美術館「お〜い!羅漢さん」展講座, 2019年6月, 香雪美術館。

・「涅槃会の変遷と涅槃図—東アジア仏教社会における「忌日」を視点に」, 「見えるもの」や「見えないもの」に関わる東アジアの文物や芸術についての学際的な研究(第1回), 2019年6月, 京都大学人文科学研究所。

・「律をめぐる宗教的環境と説話文学との架橋」, 説話文学会2019年度大会シンポジウム「鎌倉期戒律復興の実像—泉涌寺僧が果たした役割」, 2019年6月, 名古屋大学。

・「宋式仏堂空間の荘嚴—泉涌寺を事例に」, 科研シンポジウム「室町水墨画における中国道釈画の受容」, 2019年11月, 山口県立美術館。

・「長恨歌絵巻と楊貴妃観音」, 新善光寺講座, 2019年11月, 新善光寺。

・「明恵撰『涅槃講式』成立の背景—俊苧請来の宋代涅槃儀礼の視点から—」, 龍谷大学世界仏教文化研究センター日中韓国際シンポジウム「東アジア仏教思想史の構築—凝然・明恵と華嚴思想—」, 2019年12月, 龍谷大学。

**グループ1(通時的研究班)・ユニットB:近代日本仏教と国際社会**

中西直樹

・「高輪仏教大学の設立経緯とその背景」, ワークショップ「明治期の東西両本願寺における宗門大学の東京移転」, 2019年7月, 龍谷大学。

・「九條武子—女性解放への願いと女子大学設立運動—」, 熊本県多良木町「歴史回廊たらぎ2019」, 2019年9月, 多良木町多目的研修センター。

・「近代本願寺の学校教育制度の変遷」, 浄土真宗本願寺派第8回宗門教学会議, 2019年11月, 浄土真宗本願寺派伝道本部。

・「明治以降の乳幼児・児童を対象とした西本願寺の取り組み」, 第13回本願寺史料研究所公開講座, 2019年12月, 2020年1月, 築地本願寺第二伝道会館, 西本願寺門閘法会館。

・「明治期日本人僧侶の暹羅布教」, 龍谷大学世界仏教文化センター「日本と東南アジアの仏教交流」班研究総括集会, 2020年1月, 龍谷大学。

・「日本仏教海外布教の歴史的検討—真宗大谷派のアジア布教の検証を通じて—」, 2019年度東本願寺会館特別公開講座, 2020年2月, 北海道東本願寺会館。

能仁正顕

・「日本におけるチベット学研究的歩みと多田等観」, 北京・第4回日中蔵学研究セミナー並びに龍谷大学創立380周年記念事業「日中蔵学研究の現状」, 2019年10月, 北京・中国蔵学研究中心。

## グループ 2(共時的研究班)・ユニット A:現代日本仏教の社会性・公益性

若原雄昭

・「ベンガルの大地に生きる仏教徒たち—ムスリムとヒンドゥーのはざままで—」, 2019 年度第 2 回 RINDAS セミナー (2018 年度特別研究員研究成果報告会), 2019 年 7 月, 龍谷大学。

野呂 靖

・「義林房喜海の成仏義—高山寺蔵『三生成道料簡』を中心に—」, 日本印度学仏教学会第 70 回学術大会, 2019 年 9 月, 仏教大学。

・「14 世紀の東大寺華嚴—盛誉『華嚴手鏡』の形成とその周辺—」, 東アジア仏教研究会年次大会, 2019 年 12 月, 駒澤大学。

・「明恵の成仏義解釈とその周辺—義天版章疏の影響関係を中心に—」, 龍谷大学世界仏教文化研究センター日中韓国際シンポジウム「東アジア仏教思想史の構築—凝然・明恵と華嚴思想—」, 2019 年 12 月, 龍谷大学。

## グループ 2(共時的研究班)・ユニット B:多文化共生社会における日本仏教の課題と展望

那須英勝

・“Genshin’s Development of a Method for Contemplating Amida’s *Byakugō* (白毫観) and Its Influence on Japanese Pure Land Practice.” The 19th Biennial Meeting of the International Association of Shin Buddhist Studies, 2019.5, Dharma Drum Institute of Liberal Arts (法鼓文理学院), Taipei.

・「実在の浄土と観念の浄土—キリシタン教理書に投影された近世仏教の救済論—」, 日本仏教学会 2019 年度学術大会 (第 89 回大会), 2019 年 8 月, 東洋大学。

桂 紹隆

・“Mark Siderits on *anumāna*.” Buddhist Philosophy: The State of the Field, 2019 Numata Symposium in honor of the 35th anniversary of the Numata Chair Program, 2019.9, the University of California, Berkeley.

・“Mark Siderits on *anumāna*.” Philology, Philosophy and the History of Buddhism: 60 Years of Austrian-Japanese Cooperation, 2019.11, the University of Vienna, Vienna.

・“Madhyamaka and Yogācāra: A Dialogue between Two Main Streams of Mahāyāna Buddhist Philosophy.” 5<sup>th</sup> International Workshop on Madhyamaka Studies Madhyamaka and Yogācāra: A Dialogue between Two Main Streams of Mahāyāna Buddhist Philosophy, 2019.11, Ryukoku University, Kyoto.

廣田デニス

・“The Conception of Practice in Shinran.” Shin Buddhism, Christianity, Islam: Conversations in Comparative Theology, 2019.6, Institute of Buddhist Studies, Berkeley.

・“Shinran on Moral Life.” Approaches to Shin Buddhist Ethical Thinking, 2019.11, Jodo Shinshu Center, Berkeley.